

同時通訳スキル獲得の試み

袖川裕美

An Attempt to Help Intermediate-level Students Acquire Simultaneous Interpreting Skills

Hiromi SODEKAWA

The research question is how intermediate-level students of English, who have no experience of simultaneous interpreting between English and Japanese, can acquire some skills of it within the limited class hours of the university curriculum.

To find an answer, the author, who is also an experienced English-Japanese interpreter, takes a different approach from a conventional one. When the students start simultaneous trainings, they are forced into that trainings not via sufficient practices of consecutive translation.

The author uses CNN Amanpour and BBC Hard TALK interview programs as materials for Interpreting II classes, which are for picked junior students of 10–15.

Students' work requirements are as follows:

- 1) Before classes, they listen to the materials by podcast or YouTube, check vocabularies and terminologies, and think of possible translation.
- 2) During classes, they do consecutive translation and learn appropriate one from the instructor, while the instructor gives explanation of the terms and the background of the story.
- 3) Before the exam, they review the materials and translation, and get ready for any part of the materials to be simultaneously translated.
- 4) On the exam, they perform simultaneous interpreting of any given part twice for 1–2 minutes respectively in front of the other students.
- 5) After the exam, they write a report of their experience with three parts: before, during, after the performing test. More specifically how they prepare for it, what they feel and think during it, and what they should do for the future.

According to students' reports, this method works significantly well. To do simultaneous interpreting in public, they study very hard to memorize the vocabularies, understand the contents, and produce accurate and concise translation within the slot. Because they know the contents very well beforehand, they would not be in an absolute failure, and be given some confidence and thrill of the simultaneous interpreting. Then, they do pledge strongly to do better next time. In other words, this method pulls out a strong motivation from them so that it can be said as a successful and effective method as a pathway to simultaneous interpreting.

序

日本で通訳者を目指す場合、多くが民間の通訳者養成学校に通う。近年は大学(学部・大学院)でも通訳講座を開設するところが増えているが、授業数に限りがあるため、それだけではすぐにプロ(の卵)として活動できるレベルに到達することは難しい。

筆者が担当する愛知県立大学外国語学部英米学科EIC(English for Intercultural Communication 異文化間コミュニケーションのための英語)コースでは、2年生と3年生向けにそれぞれ通年の通訳講座(Interpreting I, Interpreting II)を開設している。受講する学生は、一定の基準(TOEIC 730点以上。実際は800点以上が多数)をクリアした学生であるが、まだ知識教養の獲得途上にあつて、社会経験も少ないため、規定の授業時間だけでは逐次通訳の訓練も十分にできず、ましてや“最終目標”ともいえる同時通訳の訓練までは手が回らないのが現状である。

一方、民間の通訳者養成学校では、受講者の大半が大卒の社会人で、受講期間の制限を受けず、細かなクラス分けに基づき、逐次通訳の訓練を十分に受けてから同時通訳訓練に移行していく。事情はだいぶ異なる。

こうした現状を踏まえて、同時通訳者(英語⇔日本語)でもある筆者は、効率的かつ適切な訓練を模索するなかで、ある方法に手応えを感じるようになった。本稿では、その具体的な方法と学生の反応、成果、今後の課題について論じ、「同時通訳スキル獲得」へ向けた中間報告としたい。

1. 方法

EIC コース Interpreting II (通訳II、3年生)の教材として、海外のインタビュー番組を取り上げる。授業では学生の逐次通訳に続いて、内容と訳を確認し、背景説明を加える。授業の最終回に、学習した内容について同時通訳の試験を行い、その後、試験についてレポート作成を課題とする。

1.1. 教材

① 2019年度後期(「2019後」と略)の Interpreting II (通訳II、受講生9名) アメリカ CNN のインタビュー番組 Amanpour (アマンプール) の “Sara Goldrick-Rab on the Struggles Many Students Face (サラ・ゴールドリック・ラブ氏、学生の苦境を語る)” (2019年1月30日放映)を教材として使用。サラ・ゴールドリック・ラブ氏は、テンプル大学社会学教授で高等教育を専門とし、番組ではアメリカの学生の貧困問題について語っている。これを教材としたのは、通訳力の涵養だけでなく、身近なテーマである学生の貧困問題を通して、世界一豊かなはずのアメリカ社会への理解を深めることを考慮したからである。

② 2020年度前期(「2020前」と略)の Interpreting II (通訳II、受講生13名) イギリス BBC のインタビュー番組 Hard TALK (ハード・トーク) に出演した Yuval Noah Harari (ユバル・ノア・ハラリ) 氏のトーク (2020年4月28日放映)を取り上げた。聞き手は Stephen Sucker (スティーブ・サッカー)。ハラリ氏はイスラエルの歴史学者・哲学者で、著書の『Sapiens: A Brief History of Humankind (サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福)』(2014)は1,200万部の世界的ベストセラーである。新型コロナウイルスについても、世界のメディアで積極的に発言している。今、もっとも注目される論客のひとりであるハラリ氏の知見に触れることは、通訳力の涵養だけでなく、知識教養を深め、かつコロナ危機をどう乗り越えるかについて思考を深めるきっかけになる。学習効果がきわめて高いと考えた。

1.2. 授業の流れ

1) 学生は、指定された教材について、公開されている番組の公式 podcast や YouTube を自宅で視聴し、理解し、訳を考えてくる。

2019後は、最初からスクリプトを渡し、予習を求めた。

2020前は、最初からスクリプトを渡さず、予習を求めた。

2) 授業では、学生は予習を前提に逐次通訳。筆者によるコメントとともに訳の確認。背景や専門用語の説明も加える。

なお、2020前は遠隔授業だったので、授業はzoomで行い、素材の音源は別途用意したiPadを使用した。遠隔授業前の準備段階で、zoom用に使うコンピュータで素材を流すと音が割れるなど問題があり、やや原始的ながらiPadをコンピュータに近づけて流す方が、音質がいいことが確認された。

3) 2020前では、授業の3分の2を終えた段階でスクリプトを配布。

4) 同時通訳の試験日と試験範囲を発表する。

5) 試験当日は、素材から1回1～2分の同時通訳を2回行う。順番はじゃんけんで決める。一般に最初の方が理解しやすく、勉強もしてくるので、順番による有利・不利をなくすため。

2019後は、call教室を使い、学生は前に設置されている教員用の機材を使用。皆の前に出て同時通訳を行った。

2020前は、遠隔授業のため、工夫して試験を行った。学生は全員スマホを持っているので、これを音源として自分のヘッドフォンを使い、同時通訳を行う。これを皆が視聴するという形を取った。

6) 筆者がひとりひとりにコメント。

7) 試験後、レポートの提出。試験前にどういった準備をしたか、試験中はどうだったか、試験後何を考えたかについて、すなわち試験の「前・中・後」について1ページ程度のレポート作成を課題とした。

1.3. こうした方法を試みた理由と狙い

この方法は「事前準備のないスピーチ等をその場で聞いて訳す」という通訳本来の在り方とは異なる。また上述したように、「逐次通訳の訓練に十分な時間を割いてから同時通訳に進む」という従来の方法とも異なる。その点で、通訳訓練の王道から外れていると言えるかもしれない。が、この方法は、学生に多くのことを要求する。特に試験で、現段階ではかなりハードルの高い、内容の濃いテーマの「同時通訳」を課すことによって、学生は自ら格闘して、内容への理解を深め、訳のコツをつかんでいく。

授業では、ある段階でスクリプトを与えられ、訳や背景の説明も受ける。

試験に向けて十分な準備時間も与えられる。それでも、通訳学習者としては初級レベルの学生¹⁾がこれに取り組むのは容易ではない。が、緊張のなかで通訳の“最終形”を体験することで得られるものは多い。筆者はこのように考え、時間的制約のなかで少しでも効率的に目標に近づくため、少々荒療治であることを承知のうえで、この方法を試みた。

2. 学生のレポートから

レポートはイキイキとした思いを伝える“証言集”のようなもので大変面白く、かつ、この方法を進めていく上できわめて示唆的だった。2019後と2020前に重なるところも多いので、2019後は特徴的なコメントのみとして、2020前を中心に抜粋する。

2.1. 2019後 通訳II

2.1.1. 試験前

- ・速度を落として練習した。録音をして視聴者になった気分で訳を聞いた。自信のないところは声が小さくなり、もごもごした口調になったり、逆に自信があるところはゆっくりはっきり話す傾向になることが分かった。不自然な日本語や繰り返してしまう表現にも気づいた。録音して自分の声を聴く方法は効果があることが分かった。
- ・とても自然な英語の対談ではあるがスピードはとても早く、話し方も聞きなれないものであった。通訳を意識したものではないので、最初はスピードについていくのが精一杯で、何を話しているのか理解することすらすごく難しかった。速さに耳をならす目的でリスニングを徹底的に行った。
- ・授業中は、先生から細かな説明があったこともあり、単語ひとつひとつの意味というよりはその内容に必要な背景知識やプラスαの情報をメモした。また場面に応じてフレーズには適した訳し方があるのでそれもすべてメモした。訳は、とにかく簡潔に、ポイントをおさえる。前から訳す。they や you, someへの訳²⁾は、文字通りではなく何を指しているのかを明らかにするには、繰り返して慣れる必要があった。
- ・授業で確認したような完璧な日本語訳では、明らかに日本語の量が多く、口が回らず、英語を聞く余裕がなくなる。そこで、各文の日本語訳で最

も重要な部分だけを意識して通訳を行うことにした。数字や固有名詞のように正確に訳す部分と、内容がわかれば言い回しにこだわらなくても支障のない部分が明確になり、余裕を持って通訳ができるように感じた。

2.1.2. 試験中

- ・本番で同時通訳をしている最中、英語の世界と日本語の世界を行き来している感覚がとても不思議だった。flying (飛んでいる) しているような気がした。
- ・先生がお話されたように、聴衆が英語の全く分からない人であれば問題ないが、英語の分かる人が私の通訳を聞くと訳し下手だということがばれてしまうと思った。
- ・音声に一度置いていかれてしまうと集中がプツンと切れて、今どこの部分をしゃべっているのか分からなくなってしまった。
- ・一番苦労したのは前から訳していくこと。日本語訳は後ろから行うことが多いが、ともかく前から聞こえたパートから付け足し付け足しで訳すのに苦労した。

2.1.3. 試験後

- ・授業を通してどうすればいい訳が作れるのかを知ることができたので、あとは通訳のための準備をどのくらいできるのかにかかっていると思った。また新聞を通して教養を身に付け、日本語力を強化していきたい。
- ・同時通訳するには万全の準備が必要である。準備計画を策定するのも一つの手。それでも、授業でこのようなことにチャレンジできて、とてもワクワクした。またやってみたい。
- ・同時通訳がどれほど大変であり、集中力や頭の回転の速さがとても重要であることを改めて感じた。間違えたり言葉に詰まったりしても上手く軌道修正していく冷静さが必要だと感じた。
- ・練習を通して英語の聞き取りや、英語を瞬時に日本語にする力だけでなく、聞き取った内容を要約する力やスピーカーの意図をくみ取りそれにあった語彙や表現を瞬時に選択する力、背景にある情報を踏まえてわかりやすく伝える力、という様々な力を身に付けることができた。このスキルは今後、社会に出て様々な人とコミュニケーションをとる際に大いに役立つと思う。英語を学ぶことで母語である日本語の表現やニュア

スの違いに気付けた。

- ・練習量や知識は自信に繋がると思った。
- ・一回一回の授業の密度が濃く、徹底的にどう訳せばよいか指導いただいていた。それでも、前に座るだけで頭が真っ白になりそうだった。「くらいついていく気持ちで」という先生からのアドバイスで2回目のほうが、いいパフォーマンスができた。
- ・指摘されたように、話者の声に合わせて通訳のトーンも変えられるようになれば良いと思った。

2.2. 2020前 通訳II

2.2.1. 試験前

- ・訳しづらそうな複雑な単語、時事的な単語の訳語を覚えた。単語を聞き逃さないため、練習では再生速度を遅くしたり、原稿を見ながら訳したりして全体の流れをつかもうとした。パートごとに区切って苦手な所と、比較的大丈夫な所を分けて練習した。
- ・授業中の訳をまとめ直して自分なりに内容を理解してから、実際に動画を流して訳出し、それを録音して聞き直すという作業を繰り返した。録音すると、早口で話していたり、呂律が回らなくなって何を言っているのか分からなかったりする箇所があった。特に後半になると、取りこぼしが増えるので集中力が切れないように区切りながら練習した。
- ・ハラリもサッカーも話すのが早くて追いつけず、遅れをとってしまったので、スクリプトを見ながら再訳。何を言いたいのか確認。まとめてごとの通訳、できなかったところを確認。これを繰り返した。
- ・背景知識は講義内で網羅されていたが、内容をきちんと理解するため、理解が浅い所は自分で調べ直して、知識を定着させた。繰り返し音源を聞いて、英語で内容を理解できるように努めた。次に、日本語の訳出は、最初はどこで区切りをつけて訳を始めればよいかわからず難航。長い内容は記憶力に限界がきてしまい、訳出に漏れが出る。そこでスクリプトに細かい区切りを入れて短い間隔で日本語を試みると、訳出が容易になった。タイムラグが減るまで繰り返し練習。
- ・授業中のメモとスクリプトを見ながら、発言の真意が読み取れていない箇所、不安点をすべて書き起こし、不明な単語は調べ直した。音声を繰り返し聞き、発言内容としてひとまとまりで訳すようにした。音声のみ

に集中して、シャドーイングとリプロダクションを行った。自分の頭の中の理解と、スクリプトによる正確な理解を突き合わせ、自分の認識のずれを実感した。

- ・スクリプトを自分の言葉で訳出。授業での訳と比較し、良い訳を採用し、再度、訳を作成。英語のスクリプトを見ながら、音源を流す。日本語を読みながら英語を聞く。これを繰り返した。
- ・毎週授業後、その日の訳をワードに打ち込み、自分のスクリプトを少しずつ作成。しかし、これを基に動画とともに通訳しようとする、驚くほど置いて行かれた。訳を短縮し、後ろから訳してあったものをすべて前から訳し直した。それでも同時通訳をしようとする、時間がかかるので、シンプルかつ理解可能な程度までさらに unnecessary 言葉を削減。スムーズに言えるようになるまで何度も練習。

たまたま見た動画で同時通訳者がチョコレートを食べているのを見て、自分も試験前にチョコを大量に食べて試験に挑んだ。

- ・授業中に訳した知識だけで同時通訳を試したところ、簡単な文しか訳せず、もごもごして何を言っているのか分からなかった。後ろからの訳を、簡潔で前から訳したものにしてスクリプトを作成。はじめはこのスクリプトを見ながらやり、慣れてきたら英語のスクリプトにキーワードを書き込み、それを見ながらやり、最終的にはワードリストを見ながら訳すところまでもっていった。
- ・何度も英語を試聴して内容を理解した後、日本語の訳の練習に入った。訳につまずくところを重点的に練習した。
- ・内容が難しく、ひとつひとつの話のまとまりが長いので、細かい内容がつかめていないと感じたので、まずは大まかな流れをつかむため日本語訳を作成。動画を再生しながら、スクリプトを見て、分からない単語のリストを作った。
- ・内容の後半は、日本語でさえも完璧に呑み込むのが難解だったところがあったので、「何を伝えようとしているのか」を中心に完全に文意を理解できるようにした。聞き間違いや初めて知った単語のリストアップ。再生速度を落として聞き直す。早口になってしまうところ、聞き取りづらいところを原稿にハイライト。原稿を見ながら音声を何度か聞いた。シャドーイングもやってみた。文意を理解して聞くと、耳にスッと入ってきて、遅れないので、改めて語彙力強化の大切さを実感。訳出も後ろ

からではなく、なるべく前から日本語を導き出せるように繰り返し練習。録音した通訳音声を聞くと、日本語なのに意味不明なことを言っていて、早口すぎて焦りが丸出しで、絶望し、同時通訳の難しさを改めて感じた。焦らない、落ち着いて訳すことを目標に本番まで練習した。

- ・朝ニュース番組を軽く流す程度にシャドーイングの練習をすることで、より洗練された日本語に慣れ親しむことができ、今まで理解していなかった言葉の意味を積極的に調べるようになった。ハラリの同時通訳テストでは、初めの頃に比べて日本語の選択肢の幅が広がったと実感。
- ・自分の耳をさらに慣れさせるために、あえて Hard TALK 以外の英語音声動画を聞きながら同時通訳を試みたことも何度かあった。

2.2.2. 試験中

遠隔授業なので音源チェックを兼ねながら、学生たちの気持ちを落ち着かせるため、筆者のモデル通訳に続いて、全員に最初の部分を練習パートとして同時通訳させた。試験中、どの学生の音源も途絶えることなく、PCトラブルも発生しなかったのは幸いだった。

- ・練習パートで先生の素晴らしい同時通訳を聞いた後なので怖気づいてしまい、「えーと」「えー」などの filler (埋め草) が入り、指摘を受けた。本番一回目は「えー」と言いながら同時に「あ、言っちゃった」と思ったが、無意識の癖をしっかりと認識できた。2回目は、普段言わないような言葉使いをしてしまい、指摘を受けた。
- ・オンラインを通してみんなの緊張感がひしひしと伝わってきて、空気を共有していないのに、まるで同じ空間にいるかのような感覚がした。慣らしの機会を与えられたので、緊張を鎮めることができたが、1回目は緊張から声が震えてしまい、焦りが出て、少々早口になってしまったが、訳出は自分なりに解釈した日本語を捻出できた。2回目は、落ち着いてきたので、丁寧な訳出ができたのではないかと思う。

クラスメイトの訳を聞いていると、みんな試行錯誤して努力を重ねてきたのが分かり、みんなに尊敬の念を抱いた。絶えず努力を惜しまないクラスメイトと切磋琢磨できるこの環境に感謝したい。

- ・日本語訳が遅れてしまったと感じた時に訳すのをあきらめて飛ばしてしまった部分に訳さないと内容が伝わらない部分があった。逆に、接続詞

や代名詞など、繰り返し訳す必要のない単語を何度も訳してしまうこともあり、注意が必要だと思った。

- ・人前で発表するときに緊張する傾向がある。練習ではスムーズにできても本番では流れが飛んでしまい、話を追うことができなくなることもあった。よかった点としては、複雑な単語の復習をしっかり行っていたので、自分で言おうとしていた単語の訳出はできたと思う。焦りはあったが、はっきりちょうどいいスピードで話せていた(先生に褒められた)こともいい点だった。
- ・日本語の語彙力の弱さを痛感した。同じような言い回しでしか訳せず、簡単な言葉ばかりで訳してしまうと、会話の雰囲気壊れてしまうことが分かった。
- ・現場の緊張感と、本番という状況に気持ちが高まってしまい、上手く舌が回らなかつたり、良い日本語が出てこなかつたりした。オンラインという通常よりも相手と隔たりもあり、自分の空間で通訳に臨めたにもかかわらず、である。日本語語彙の補強も大きな課題だと感じた。
- ・緊張して冷や汗をかいた。みんなが本当によくできるのでプレッシャーが大きかった。用語がたくさん出てきて、一文が長い文章は難易度が上がる。とにかくしゃべり続けなくてはという気持ちで臨んだ。

みんなの通訳を聞いて、さまざまな癖を発見するのは面白かった。

- ・非常に緊張して、冷や汗が出て、カメラ越しで険しい顔になっていたと思う。本番では、頭が真っ白になり、少し出遅れた。置いておかれたくなくて、訳をシンプルにしすぎてしまった。それにより内容が伝わりづらくなってしまったとの指摘を受けた。聞いている観客の気持ちを忘れてはいけないと痛感。しかし、「私」や「我々」の数が少ないと先生に褒められて嬉しかった。
- ・何度も練習していたので、それほど緊張しないだろうと考えていたが、実際に試験当日になるとやはり手に汗を握る思いだった。結果としては、本番も練習時と同等の通訳ができたと感じたが、もし初見でこの音源を同時通訳することを求められたらと思うと、通訳の難しさを再認識した。
- ・練習を重ねたから大丈夫だと思っても、本番の緊張感を伴って訳をする、些細なこと集中がそがれることが分かり、わずかな時間ながらも通訳の重責と緊張を実感できた。先生が著書で、通訳を「日々の研鑽と経験で技が磨かれる職人とアスリートを合わせたような職業」という

のが身に染みて理解できた。

- ・簡単な会話はスムーズに訳せたが、専門用語や関係代名詞でつながる長い文章は、止まってしまうことがあった。長い文章では、後半のほうの単語がぼろぼろと抜け落ちてしまうので、自分でも自分が何を言っているのか分からなくなることがあった。文章のつながりを意識しつつ、それぞれの単語の意味を文章に合わせて訳していかなければならない作業が非常に難しかった。また「私」「あなた」「彼ら」といった単語や「えっと」、「えー」といった filler を使う癖がなかなか抜けないのが難しい。あれだけ練習したと思っても本番になるとパニックになってしまった。
- ・前から順に訳すようにしていたが、情報をつけ足すときにその前の文章で自分がどの動詞を使って何と言ったのかを忘れてしまい、意味の通じる訳ができていたか不安になった。内容は理解していても、専門用語が急に耳に入ってくると焦ったり、ド忘れしたりしてしまった。話し手が目の前にいない動画ではあったが、同時通訳の臨場感を味わえた。
- ・日本語の語彙力のなさを痛感した。

2.2.3. 試験後

- ・想像していた以上に難しいものであり一朝一夕ではどうにもならないものだと感じた。通訳する際の会話の内容がカジュアルなのか、フォーマルなのかで通訳のニュアンスが変化してくるため、そこにも柔軟に対応し適切な訳出を行わなければならない。

日本語の引き出しを今以上に増やす必要がある。YouTubeなどで英語の動画をシャドーイングすることで逐次だけでなく同時でもさらなる高みに行けるよう日々精進していきたい。

- ・通訳の難しさを感じた。準備や訓練にどれだけの時間と労力が費やされていたのか身をもって感じた。しかし、通訳のための勉強は言語を学ぶ上でとても有益な勉強法である。はっきりと通訳を目指すわけではないが、その時のため後期の授業にももっと積極的に取り組みたい。授業を通して知った自分の弱点を克服できるように準備したい。
- ・同時通訳はマルチタスクなものだと考えたので、複数の作業を同時にすることを体で慣れさせることが、同時通訳には役立つと思った。下準備に時間をかけ、本番にしっかり備えたい。将来通訳を仕事にしないにしろ、通訳に慣れることは英語の四技能を上達させるのに重要だと感じた。

- ・英語の語彙力に加えて日本語の豊かさも必要。通訳は緊張と不安がつきまとうが、それこそが醍醐味であり、どんな会話や文章でも一つ一つ根気よく付き合っていく忍耐力が必要だ。分からなくなってくると集中力が切れていくが、分からなくてもとにかく訳していくことと、諦めない姿勢が大切だと思った。この授業は難易度が高かったが後期も尽力していきたい。
- ・自分がとっさに上手く訳せた時の快感だけでなく、クラスメイトの雰囲気、訳の仕方に触発され、もっとこのような経験を続けたい。円滑なコミュニケーションには、宗教的事情、文化的背景など深い要素に対する理解が必要不可欠であると痛感。自分の将来を考えるうえで、この時期にこのような形で授業を受けられたのは、むしろ対面より多くを得て、考えることができたので僥倖であった。
- ・1分ほどの同時通訳でも疲労感がものすごくあった。これをずっと行う通訳者は集中力や体力の面でも本当にすごいと思った。練習量がまだまだだと感じる。日本語を話す上での癖が無意識に出てしまうので、どちらの言語を話すときも意識したい。

同時通訳用の教材ではなく、話し手も通訳がいることを想定せず話していたので、もっと基礎的な教材で土台を固めていきたい。短い動画などをチームで協力し合って訳してみたいと思う。

- ・今回、通訳を擬似的に体験することで、いかに仕事としての通訳が困難さと面白さの両方を内包しているか、身をもって知ることが出来た。通訳を練習することによって、英語を聞きとり、理解する力が格段に引き上げられるということを実体験した。
- ・同時通訳をする際、多大な集中力と神経が必要で、袖川先生がこれを何度も経験していて本当に感動した。通訳の授業を通して、「あなた」を使わずに「おっしゃる」を用いる³⁾というのを学んだことが、今もとても役立っている。この授業や試験を通して、毎回緊張感があって脳や心が非常に刺激され、忘れられない経験となった。

後期には日本語から英語の同時通訳もやってみることは可能か。

- ・同時通訳に挑戦してみて改めてその難しさを思い知らされた。これほど丁寧に訳をして何度も練習して準備をしても、たった1分でも難しかった。みんなの訳を聞いて、それぞれの個性が出ていて面白いと思ったが、みんなまだ初心者なので、全体に早口で聞き取りにくいと感じたところ

があった。練習を重ねていくうちに、少し固めな訳もフランクな会話調の訳も落ち着いてできるようになりたい。訳していて言い直しが多かったので、これを減らし、きれいな日本語の訳をできるように頑張りたい。

- ・通訳は、以前は遠い仕事だと思っていたが、今は少し身近に感じている。日本語と均衡のとれた英語能力を目指したい。ほかの生徒が話しているときになんとなく聞くのではなく、自分の中で正しい日本語に直したりして、英語と日本語でバランスの取れた人間になりたいと思った。
- ・スクリプト翻訳済で練習済という状況で臨み、自分のスクリプトまで作って臨んだのに、そこまでしても、しどろもどろになるのかと自分でも驚いた。これまでの同時通訳はスピーカーも生徒だったのでゆっくり話してくれたが、今回は通訳者に全く関係なく話し続けるものを通訳したので、難易度が全く違った。世の中の同時通訳者の方々を尊敬する。焦ると早口になると、語尾が強くなる傾向にあるよう [指摘を受けた] なので、今回は気を付けたい。
- ・授業の度に、クラスメイトから刺激を受け、自分を奮い立たせることができた。今後は、もう少しレベルを落とした教材を使用した同時通訳の練習も取り入れて、同時通訳プロの袖川先生からコツやアドバイスなどを教えていただけると、より濃いものになるのではないかと思った。
- ・専門用語が抜けていたり、その場でうまく訳すことができなかつたりしたので、もっと勉強する必要があると感じた。今回の動画はスピードも速く、通訳をするために作られた映像ではなかったので、とっつきにくさを感じた。まずはもう少しレベルを下げたり、取り組みやすい題材を選んだりして、細かく練習していきたいと思った。

3. 経過と成果

3.1. 経過：2019後から2020前へ

2019後にはこの手法に手応えを感じたが、Interpreting II最後の学期だったので、この後の学生の成長を見届けられなかった。芽生えた学習意欲を定着させるコース設定（例：4年生向けの Interpreting III）がないのが惜しまれる。

そこで、2020前では、コロナ禍による遠隔授業という不利な環境のなかではあるが、この方法を半期前倒しで適用することにした。また、やや

難しい題材、およびスクリプトの後日配布など、難度も一段引き上げた。コロナ禍という時代性のある素材を学ぶことの意義と、学生の学習意欲の全体的向上が、こうした決断を後押ししたのだが、教員にとっても賭けであった。そこで、学期始めに、学生には、コロナ禍で外出制限がかかることは、言い換えれば勉強に時間をかけられるということだと強調し、「危機をチャンスに変える」との目標を示した。

3.2. 2020前の成果

具体的な成果については、レポートの抜粋が示す通りであるが、以下に筆者の側からの観点を述べたい。

想像した以上に、ハラリ氏の発言を理解するのは容易ではなく、学生が苦勞していることは授業でも十分に認識できた。

ハラリ氏は、各国政府がコロナ禍を理由に、追跡アプリ等で入手した個人情報を使って国民を管理し、独裁化することに懸念を示している。学生は、独裁政治、民主主義、立法府の機能停止などという用語は聞き知ってはいても、それが何を意味するのか、日本語でも理解しているとは言えなかった。筆者はかなり丁寧に説明したが、これが難しいと感じさせる要因となった。

そのため、この素材を同時通訳の試験問題にするのは、筆者としても不安だったが、これは杞憂だった。学生は、最終的には、試験に向けて試行錯誤しながら相当量の学習をこなし、そのなかで内容への理解も深めていった。訳出そのものには不備はあるが、理解したことを示す訳出だった。加えて、学生は試験と言う形で本番の緊張を味わい、通訳の難しさを実感し、同時通訳がどういうものかを身をもって体験したのである。結果的に誰一人として全くできなかったという者はいなかった。むしろ自信をつけたくらいである。目標は達せられた。

以上のことから、通訳初学者ながら、学生は同時通訳への手掛かりをつかんだといえよう。半期で学べる内容としては、相当に生産性が高く、筆者の想定した以上の成果を上げた。

というのも、「こうしたチャレンジができてワクワクした。もっと続けたい。次にやるときはもっと上手くなりたい。頑張りたい。尽力したい。精進したい」と言う学生が少なからずいたことである。強い思いの伝わるこうした言葉を引き出せたことは、この方法の最大の成果だったのではな

いか。この気持ちこそが強い motivation(やる気)となるからだ。プロになっても、究極的には「もっと上手になりたい」との思いだけが、困難を乗り越える支えとなる。それが早くも芽生えたのは極めて重要なことで、この気持ちを維持できれば、勉学の推進力となり、自ずと力がついていく。

3.3. ダニエル・ジャイルの定義

最後に上述の成果について、ダニエル・ジャイル Daniel Gile の論に沿って捉え直してみよう。ジャイルは通訳に必要な能力を次のように定義した。

Comprehension (言語能力) =

KL (Knowledge of the Language 言語力) +

ELK (Extra-Linguistic Knowledge 知識) + A (Analysis 分析力)

学生を含め、一般に英語ができれば通訳は自動的にできるとの思い込みが流布しているが、ELK (知識) がなければ通訳はできない。今回の課題で、学生は知識の重要性と、英語だけでなく日本語 (KL 言語力) の重要性についても認識を新たにしようである。また、関係代名詞で長々とつながるような発言をどう訳していくべきかに取り組むなかで、英語を分析的・立体的に理解し、何をどう残すことが伝わる訳出になるかについて考えた。すなわち A を身に付けつつあるのである。

なお、言語能力を支える知識教養の獲得については、ここでは詳述はしないが、My Reading Project⁴⁾という読書プロジェクト、および他の関連授業 (Communication Studies) での News of the Week⁵⁾によって、補強している。

4. 今後の課題

以上、この方法の有効性は立証されたと考える。ただ、この試みを正式に始めてからまだ一年なので、今後、継続・発展させていく上での課題についても触れておきたい。

2020前で、この方法の鍵となるのは、どんな教材を選ぶかにあることを実感した。筆者は基本的に「旬のトピック」を選んでいるが、この期は教材の難しさから、「もう少し易しい教材、通訳が入ることを前提としてゆっくりと話してくれる教材」を求める“悲鳴”が聞こえてきた。だが、人工的に作ったもの以外に、現実の社会に「易しい素材」など存在しない。

軽いトピックだからといって、通訳しやすいわけではない。スピードについても、通訳者が目の前にいる逐次通訳の時さえ、スピーカーは興が乗ると通訳者の存在を忘れる。話すスピードは個人に固有のもので、容易には変えられず、話を細かく切ることもできない。思考が中断してしまうからである。また仮に扱い易い素材があつたとしても、将来的にあまり役に立たない。

であるから、今後とも、意図的に“簡単そうな”素材を選ぶことはしない。が、今後、難度の高い課題を出すときは、1) 最初に、なぜそれが必要か、それによって何を得られるかを十二分に説明する、2) 専門用語の解説と理解をこれまで以上に徹底することとしたい。それが今回の筆者の学びだった。

さらに、今回は試験を課すことで、学生が同時通訳スキルを自力で獲得する方法を取ったが、今後は試験だけでなく、普段の授業でも同時通訳を取り入れ、助言したい。学生は同時通訳のためには何が必要か理解しつつあるので、こちらの言うことがよく理解できると思われる。

ただ、時間の制約があることに変わりはない。逐次通訳から同時通訳への道筋をつけた後に、スキルを積み上げる時間が足りない。通訳クラスの拡大を求めたいが、この点は、大学における通訳授業の位置付け、ひいては大学の将来設計に関わる問題である。今後、機会があれば提起していきたい。

注

- 1) 筆者は、授業で「彼ら、あなた、何人かの人」と言った人称代名詞(訳語)は使わないよう指導。日本語として不自然な場合が多いからだ。
- 2) 英語学習者のレベルをどう捉えるかは、相対的なものなので明確な区分はない。EIC コースでは2年生の受講コースを *Interpreting I* (通訳 I)、3年生のコースを *Interpreting II* (通訳 II) としている。この区分では後者は中級である。また、TOEIC の得点からも EIC 3年生は中上級レベルといえよう。そのため、英文の *abstract* では *intermediate-level* (中級レベル) を使った。だが、通訳学習者としては初級というのがふさわしいであろう。
- 3) 上記の注1) でも述べたことと関連するが、外国語(英語)の影響を受けて、近年、日本語でも人称代名詞を「訳」した言葉(あなた、彼、彼女、彼ら、彼女ら)を使う例が増えている。だが、基本的に日本語では使わないほ

同時通訳スキル獲得の試み

うが自然である。「あなた」については、相手が目上であれば、「あなた呼ばわり」は失礼になる。ところが、日本語に訳出する際、英語にひきずられて「あなた」を多用しがちである。これを避け、誰に向けた発言かを明確にするには敬語を使う。例えば「あなたは〇〇と言いましたが……」ではなく、「〇〇とおっしゃいましたが（言われましたが）……」とする。また、厳しい時間制限がかかる同時通訳で、0.1秒でも尺（時間）を稼ぐためには、言わなくても通じる人称代名詞に時間を割く余裕はない。授業でこのような講義をした。

- 4) 2020年度から開始。半期に8冊を目標に本を読む(冊数は各自決めてよい。英語1冊は日本語4冊として数える)。必読本と推薦・参考本を提示。1冊につき1ページ程度のレポートを作成。授業では半期を通して、ひとり1回、1冊の本について英語で5分程度の発表をする。この課題も多すぎると「非難轟轟」だったが、最終的には学生はよくやり、他の学生の読書報告を聞くのは楽しく、読書の習慣がついたとの感想も多数寄せられた。
- 5) この試みは2015年度後期から継続していて、筆者のクラスでは必修である。日本語のニュース2本とそれに関連する英語のニュース2本を選び、ファイルを作成。毎授業、全員が1本のニュースについて英語で短いレポートを発表する。

参考文献

- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』 研究社
- 袖川裕美 (2016) 『同時通訳はやめられない』 平凡社新書
- 袖川裕美 (2017) 「通訳基礎力のための新聞活用：学生が選ぶ「今週のニュース」」 『ことばの世界』 第9号 愛知県立大学通訳翻訳研究所
- 袖川裕美 (2019) 「トランプ大統領の同通に挑戦」「現場対応力を磨こう！ 放送通訳者の生同通スキル 第1回」 『通訳翻訳ジャーナル 2019 Spring』 イカロス出版 pp. 88-92
- 袖川裕美 (2019) “再び、トランプ大統領の同通に挑戦” 「現場対応力を磨こう！ 放送通訳者の生同通スキル 第2回」 『通訳翻訳ジャーナル 2019 Autumn』 イカロス出版 pp. 104-108
- 袖川裕美 (2019) “香港問題を取り上げる” 「現場対応力を磨こう！ 放送通訳者の生同通スキル 第3回」 『通訳翻訳ジャーナル 2019 Winter』 イカロス出版 pp. 88-92
- 袖川裕美 (2020) “再び、香港問題を取り上げる” 「現場対応力を磨こう！ 放送通訳者の生同通スキル 第4回」 『通訳翻訳ジャーナル 2020 Spring』 イカロス出版 pp. 114-116

- 袖川裕美 (2020) “中東問題を取り上げる” 「現場対応力を磨こう！ 放送通訳者の生同通スキル 第5回」 『通訳翻訳ジャーナル 2020 Summer』 イカロス出版 pp. 88-92
- 袖川裕美 (2020) “再び、中東問題を取り上げる” 「現場対応力を磨こう！ 放送通訳者の生同通スキル 第6回」 『通訳翻訳ジャーナル 2020 Autumn』 イカロス出版 pp. 104-108
- 袖川裕美 (2020) 「風刺画のコミュニケーション力—『エコノミスト』 (*The Economist*) の表紙IV—新型コロナウイルスに見舞われた世界—」 *MULBERRY* (愛知県立大学外国語学部英米学科論集) 第70号 pp. 1-30
- 柴原智幸 プロが薦める勉強法 #13 アルク retrieved from <https://www.alc.co.jp/tg/benkyo/interview/13/>
- Yuval Noah Harari (2011 in Hebrew) (2014 in English) *Sapiens A Brief History of Humankind* Harper. Yuval Noah Harari: official site <https://www.ynharari.com/>
- BBC Hard TALK Stephen Sucker’s interview with Yuval Noah Harari retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=gfVrin7Y>
<https://www.bbc.co.uk/sounds/play/w3cszc1p>
- CNN Amanpour Sara Goldrick-Rab on the Struggles Many Students Face retrieved from <http://www.pbs.org/wnet/amanpour-and-company/video/sara-goldrick-rab-on-the-struggles-many-students-face/>
- Daniel Gile (2009) *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training* (John Benjamins Translation Library, vol. 8), revised edition, Amsterdam & Philadelphia
- Elk- “The Most Important Factor In The Comprehension Process Of Interpreting” *Academic Writings*, October 23, 2012, retrieved from <http://whostar2401.blogspot.com/2012/10/elk-mostimportant-factor-in.html>